Heritage of Setoda , Geishu

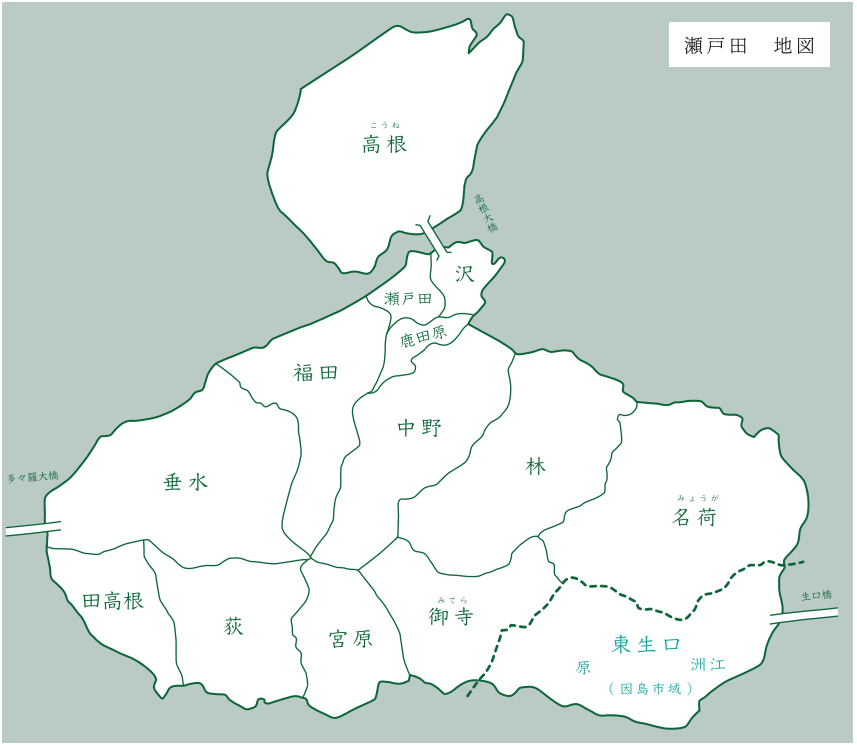
尾道文化遺産マップ4

絵葉書帖【芸州瀬戸田】

芸州瀬戸田
尾道文化遺産実行委員会

カテゴリ分類

- 風景遺産
- 民俗遺産
- 歴史遺産
- 石造遺産
- 建築遺産
- 自然遺産
- 人物遺産
- 祭礼遺産
- 美術遺産



尾道文化遺産マップの趣旨

文化財の指定にはないものの、地域の歴史・民俗・景観を伝える地域遺産として、守りたい、伝えたいものにスポットを当てるものです。

初回の港町（尾道旧市街）・里山（御調）編、二作目の因島編、三作目の向島（東西及び岩子島）編に続いては、生口島の旧瀬戸田町域から、そうした地域遺産を拾い集めてみました。

ここでピックアップされたものはあくまでも一部に過ぎず、まだまだ掘り起こせば埋もれた地域遺産は見出せると思います。

ありきたりではない、ちょっとディープな瀬戸田散策のお伴にお届けする瀬戸田遺産の絵葉書帖。

散策の中で、自分だけのマイ瀬戸田絵葉書を切り撮ってみてください。

※…生口島の内、東生口エリアは旧因島市域となる為、因島編の内でピックアップしています。

尾道文化遺産塾実行委員会製

01 高根大橋とりゅうごんさん（又の名をジュンゴンさん）

【瀬戸田・高根島】

オレンジのカラーが海と空の青に映えるアーチ橋――高根大橋を間近に望む突堤に、石造の小祠が佇む。

「りゅうごんさん」、或いは「ジュンゴンさん」と呼ばれるこの神は、海上及び航海の安全と豊漁の祈りを寄せられる海の神。

祭礼の折に立てられる幟旗には「大渡津神」と書かれ、それは日本神話に見る海神・大綿津見神に該当する。

「ジュンゴン」は不明ながら（ジュゴンがそこによぎる）、「りゅうごん」は「竜宮」が訛ったものと想像され、ワタツミ神の在所である海底竜宮を意味するのではないか。

りゅうごんさんに隣接して、高根島への渡船場がかつてあった。

昭和31年（1956）からは町営として運航され、島民に長く親しまれたが、昭和45年（1970）に高根大橋が開通し、その姿を消した。

ンサンゴウュリト橋大根高　壱
Heritage of Setoda

02 瀬戸田港の常夜燈

【瀬戸田】

瀬戸田港の桟橋傍らに建つ立派な常夜燈は、江戸後期・文化11年（1814）に、瀬戸田の海運・塩田関係者によって造立されたものと伝え、寄進者の屋号と名も刻まれる。高さは4メートルで花崗岩製。

港に建つ常夜燈は瀬戸田水道を照らす灯台の灯りであり、また一方で金毘羅灯籠とも呼ばれる通り、船乗りの信仰篤い四国讃岐の金刀比羅宮への献灯の灯りでもある。

合わせ彫で刻まれる神号は金毘羅大権現の他、瑜伽大権現（倉敷児島の由伽山）、住吉大明神（大阪の住吉大社）、厳島大明神（宮島の厳島神社）、伊勢両皇大神宮（伊勢神宮内宮・外宮）と、海上信仰で著名な神々が並び立つ。

燈夜常ノ港田戸瀬　　弐

03 力自慢を刻む力石

【瀬戸田】

大きな石を持ち上げ、力自慢を競った力石は全国各地に見られ、瀬戸田町内にも確認される。

港から程近い新町の家並みの一角に鎮座する秋葉神社―その境内に残る力石は計4個。

重さはおよそ100キロあるとされ、港で荷物の運搬に従事する港湾労働者を中心とした力自慢達が、祭礼などにおいて余興的にこれを持ち上げ、互いにその力を競い合った。

秋葉神社は火伏（防火）の神として知られる秋葉信仰の社で、静岡県浜松市の秋葉山に鎮座する秋葉神社が総本宮。因みに東京の秋葉原もこの信仰に因む地名になる。

玉垣の内には、「尾道市土堂町　元新町住人永井勝三」の刻銘があり、他にも尾道市の寄進者が確認される点にも着目しておきたい。

石力ム刻ヲ慢自力　　叅

Heritage of Setoda

04

大墓と呼ばれる念仏塔（六字名号塔）

【瀬戸田】

しおまち商店街沿いに建つこの碑は、「大墓」と通称される。

正式には「六字名号塔」で、南無阿弥陀仏の六字名号、いわゆるお念仏を刻む碑で念仏塔とも括られ、遺骸を埋葬するお墓ではない。

台座に刻む刻銘には、江戸時代後期の弘化4年（1847）の年号と共に、世話人となる竹本屋、木屋、大坂屋、能地屋、野田屋の屋号が見られる。石工は尾道の川崎友八の作。

名号碑は東日本を中心に各地に点在し、それらは浄土宗の僧で念仏布教に諸国を巡った徳本行者の足跡とされるが、大阪以西に徳本の足跡はない。

その弟子の一人が瀬戸田に寄寓している事から、造立はその弟子・本励師の働きかけによるものと見られている。

塔佛念ルレバ呼ト墓大　四

Heritage of Setoda

05 万徳寺のええもん（山門）

【瀬戸田】

美術 建築

その昔の尾道町内では、「ええ（良いの方言）門は福善寺、かたい門は持光寺」という唱え言が聞かれた。これは子どもが「ええもんちょうだい」と親にお菓子などをせがむと、ええもん（良い門）は長江の福善寺山門であるとはぐらかす返答だった（西土堂の持光寺は石造の山門から硬い）。

これが瀬戸田にあっては、「ええもんなら万徳寺へ」と唱えられたという。

浄土真宗報恩山万徳寺の山門は総ケヤキ造りで明治34年（1901）の建立。その見事な彫刻は尾道の彫工・一華園永治の手になる。

Heritage of Setoda

06 潮音山から望む瀬戸田水道

【瀬戸田】

国宝の三重塔を擁する潮音山向上寺（曹洞宗）の位置する潮音山公園 ― 山上から三重塔越しに広がる瀬戸田水道と町並みは、まさに絵になる風景で、画家・平山郁夫もスケッチポイントの一つとして切り取る景勝である（「しまなみ海道五十三次の内」）。

向上寺は中世の瀬戸田を伝える歴史ある寺院で、生口島の地頭・生口守平によって応永7年（1400）に創建された。

足利将軍家からも祈願寺として保護されて、足利の家紋である丸に二つ引両紋の使用も認められるなど、格式を誇る古刹である。

道水田戸瀬ム望ラカ山晋潮　六

Heritage of Setoda

07 「ふたつかわ」と親しまれる二つ井戸

【瀬戸田】

北町の路地裏に、二つ並んである井戸は「ふたつかわ」と呼ばれて昔から親しまれている。通りから見て手前を「女水」、奥を「男水」という。

井戸の事を「かわ（川）」と呼称するのは、向東町に見た「太閤川（たいこうがわ）」（太閤井戸の意味）もそうだった（前作の絵葉書帖「向島・岩子島編」に収録）。

二つ川こと二つ井戸は、それぞれで水脈が異なるというから興味深い。

生活用水はもとより、その昔は船乗りにとっての飲料水確保でも重宝された良水だった。

良水で言えば、福田地区にも名水と賞され、茶の湯の上でも好んで用いられて、遠方からも汲みに訪れる人がいた井戸も知られる

戸井ッ二　ワカツタフ　　七
Heritage of Setoda

08 平山郁夫の風景

～「私の実家のある通り」より～

【瀬戸田】

高根大橋を間近に望む海岸沿いから、山側の路地裏へ一つ入ると、細長い道が山裾に沿って続く。

その路地に瀬戸田出身の日本画家・平山郁夫（1930～2009）の実家があり、すぐ傍には神仏習合で祀られた清正公神社（せいしょこさん）がある（日蓮宗・法華信仰の中で加藤清正を神として祀る清正公信仰の一つ）。

平山郁夫の「しまなみ海道五十三次」の内に描かれた「私の実家のある通り」は、やや高台に位置する清正公神社の入口地点から見下ろす景で、路地の中に混み入った家並みと、その向こうに見える海と山…平山郁夫が愛した日常風景が今も変わらずそこに広がる。

景風ノ夫郁山平　八
Heritage of Setoda

09 力士の墓 ～圓林寺墓所～

【瀬戸田】

平山郁夫生家から程近い位置にある圓林寺（曹洞宗）の墓所入口には、相撲取り、力士の墓碑が建っている。

正面には「銭ヶ嶽岩右衛門墓」と刻み、裏面には周旋人、即ちこの墓碑造立の仲立ちや世話をした人の名前が列記されるが、克明に読み取る事は困難にある。

銭ヶ嶽という力士を照会してみるも、その名を確認できる資料は見当たらない。

その昔には瀬戸田にあっても地元相撲が盛んにあったらしく、隣の因島でも宮相撲（お宮への奉納相撲）の歴史が聞かれるところなどから、ローカルに活躍した力士と見られる。

資料上では確認できずとも、こうして世話人らの手によって立派な墓碑が建てられている事からして、ヒーローのように愛され親しまれたであろうその存在感が、静かに偲ばれてくる。

墓ノ士カ　　丸

Heritage of Setoda

10 石風呂跡

【瀬戸田】

瀬戸内の各所で、その昔に見られた風景に「石風呂」というものがあった。

石室の中で火を焚いて室内を熱した後、床面にムシロや海藻などを敷いて入浴する、現代に見るサウナの原始的な風景になるもの。

その石風呂の一例が、瀬戸田港の傍にも見られた。

高根大橋の瀬戸田側橋脚下の岩肌に開いた小さな石室がそれで、現在は遺跡の扱いで使われる事はない。

広島県内では竹原市忠海の岩乃屋が知られたが、近年に閉業されてこちらも遺跡となってしまった。

尚、瀬戸田町内では、宮原地区にも石風呂が設けられていたという。

跡呂風石　拾　Heritage of Setoda

11 青空に映える白亜の美～未来心の丘～

【瀬戸田】

瀬戸田の賑わいのその昔は海運、塩田（製塩業）、柑橘栽培等の隆盛にあったが、現代以降は観光の島としても賑わう事になる。

その契機を成し、今にその存在感を放っているのが西の日光と称された耕三寺（浄土真宗本願寺派）であり、尾道市名誉市民でもある耕三寺耕三師が、母への追慕供養と報恩感謝で建立した大寺で、「母の寺」とも呼ばれる由縁はそこにある。

全てが「映える」壮観なる堂塔伽藍の中で、最近の映えるスポットとして大きく注目・発信されているのが境内最奥の「未来心の丘」―

イタリア採石の大理石で形成される白亜の空間は、世羅町出身で世界的に活躍する彫刻家・杭谷一東氏による作品。巨大な屋外アートであると同時に、光明の塔を軸にした（本尊と見て）、和洋折衷なるもう一つの宗教世界・精神世界をどこか見るかのようでもある。

12 厳島姫の島巡り縁起 ～浜の明神～

民俗

【鹿田原】

中野の茶臼山城（66頁参照）に拠った生口氏の支城の一つ・俵崎城址の東麓に、城山広場という名の広々とした公園が整備されている。その傍らに見える社殿は、明神さんと通称される厳島神社になる。

宮島厳島神社に祀られる三女神の内、主神的に映る市杵島比売神（厳島姫）と塩作りの神・塩筒之翁神を祀る。

海上往来と塩作りの神から、瀬戸田の海運と塩田の歴史を偲ばせるスポットになるが（狛犬の寄進は地元製塩業者になる）、ここで着目したいのは厳島姫の伝説―

厳島姫は宮島の地に落ち着かれるまで、安住地を求めて瀬戸内の島々を巡り、生口島も寄られた。その伝説を縁起とするお宮で、安芸国の領域では最初の厳島神社になるとの一説も…因みに備後領域では因島、岩子島にも同様な伝説を聞く。

厳島姫伝説は母子譚にもなっており、傍らで遊ぶ子ども達を優しく見守る、母なる女神のようにも映る。

※…公園で遊ぶ子ども達は瀬戸田町内・博愛幼稚園のみなさん（遠足風景）。

13 葛宮井 ～葛城神社のスサノオ伝説～

【鹿田原】

厳島神社前の道を南へ進むと、もう一つのお宮に行き着く。道路に直面するこちらのお宮は葛城神社と称し、奈良県御所市の葛城一言主神社の分霊社と想像されるが詳しい来歴は分からない。

境内には池があり、『瀬戸田町史・民俗編』で採集された伝承によれば、この湧き水は「葛宮井」（井は井戸の意）といい、神話の八岐大蛇退治で名高いスサノオ神が、飲料水を求めて当地を探索された際に発見した湧き水で、「藤葛の根に水が溜まっているのを見つけて掘った故事」により、「飲めば流行病にかからず、洗えば目病を治し、薬草を煎じるにもこの水を使った。竹筒に入れてうけて帰り、病気が治ればお礼に清水の水を供えにきたという」（町史）。疫病流行時にはとりわけその信仰が高まったらしい。

祭神の内にはスサノオの名はなぜか見えず、その辺も謎めいていて興味深いが、備後地方に分布するスサノオ伝説が、芸予諸島にも見られる点にも着目しておきたい。

井宮葛　参拾
Heritage of Setoda

14 戦国乱世（らんせ）の記憶を伝える 一本松大岩の地蔵さん

【福田】

福田地区の磯辺に建つ吹き抜けの赤いお堂に、海を見つめるお地蔵さんがいらっしゃる。お地蔵さんは「一本松地蔵」と呼ばれるが、一本松は既に見えない。

戦国乱世の時代、生口島に拠る生口氏は小早川氏の系統ながら、毛利方と敵対した大内氏と結んでいた。その為、小早川隆景は生口氏攻略に乗り出し、福田沖で両者激突した。この合戦での戦死者を供養する目的で、後に建立されたのが一本松地蔵だった。

乱世の記憶を留めるお地蔵さんは今、平和で穏やかな瀬戸田の海を静かに見守り続けている。

ンサ藏地ノ岩大松本一　四拾
Heritage of Setoda

15 長光寺（ちょうこうじ）のヤマモモ

【垂水】

サンセットビーチから観音山の登山道へ進むと見えるお寺は、曹洞宗の長光寺―その山門傍らに枝を大きく広げるのはヤマモモの木で、夏には赤い実をつける常緑樹。

長光寺のヤマモモは樹齢４００～５００年とされ、県下では最大級、瀬戸内の島嶼（とうしょ）部では随一と目される古い大樹になるが、天然記念物の指定にはない。

その大樹の下には片足を立て、頬杖（ほおづえ）をつく石仏が祀られ、如意輪観音（にょいりんかんのん）だろうか。穏やかないいお顔をされている。

龍宮風にも見える山門から望む風景も、しばし立ち止まらせるスポットである。

モモマヤノ寺光長　伍拾

Heritage of Setoda

16 芸予諸島最高峰 国立公園観音山からの眺望

【垂水】

生口島の南西部にそびえる一際高い山は、観音山、別に火の瀧山と呼ばれる山で、標高472・3m。芸予諸島では最高峰の山になる。

山頂には山の名の由来となる観音様が祀られ、こちらの火の瀧観音堂は、因島重井の白滝観音、忠海の黒瀧観音と並ぶ三嶺三大観音として篤い信仰を受ける（別に雨乞いの霊地とも）。

この山には平家の落人伝説も秘めるようで、平家に護られた安徳天皇も身を寄せ、仮の御所も設けられたと語り伝わる。

中腹から山頂への登山口傍には駐車場があり、展望スポットにはあるが、その下の登山道路脇にある休憩スペースからの眺望がおススメ（写真の地点）。

望眺ノラカ山香觀園公立国　六拾
Heritage of Setoda

17 イボイボうつれ、イボ地蔵

【田高根】

瀬戸田には、何がしかの逸話や霊験を秘めたお地蔵さんがやけに多い。

田高根地区の「いぼ地蔵」もその一つで、その名の通りイボ取りの御利益にあるお地蔵さんになるが、その背景に次のような民話を秘める。

昔昔、この里に意地悪な男の子がおった。誰も遊ぶもんも居らず暇を持て余しとったところ、自分の足に大きなイボが出来とった。イボを数えてゆくと日に日にその数は増して、しまいにゃあ体中がイボだらけになってしもうた。

そんな時に薬売りの人から、イボを触った手でイボうつれと他の人を触ればイボはうつると教えられ、そのようにするとイボはどんどんうつっていった。里の子ども達は皆イボをうつされサァ大変。

もはやうつす相手がおらんようになってしもうた所でこのお地蔵さんにイボがうつった。すると男の子のイボは全て取れた。続いて他の子ども達もお地蔵さんにイボをうつしてこれにて一件落着。以来男の子は悔い改めて親切な子になったそうな。

藏地ボイ　七拾　Heritage of Setoda

18 妖怪騒動と足長地蔵

【荻】

荻地区の南小学校跡から山側へ少し進むと、大きな藁草履を吊るしたお堂がある。お堂は生口島の島四国八十八ヶ所の内の第三十三番札所・雪渓寺になるが、足長地蔵の名で親しまれる。その云われは次のようなものである。

昔昔の事、のどかな荻村に化け物騒動が巻き起こる。天井から毛だらけの大きな手が伸びてきたり、畳から水が湧き出したり、茶碗がみるみる巨大な顔になってみたりと、妖怪変化に寝込む者まで出て来た。

困った村人の与作は、日頃から大切にしていた裏のお地蔵さんに祈った。するとお地蔵さんが夢枕に立ち、見た事もない大きな大きな草履を作って戸口に吊るせば化け物は退散すると教える。その通りにすると化け物は消え失せ、村は平穏に戻ったというもの。

巨大な藁細工を集落の入口や境界に設けるのは道祖神信仰に見られる。

怪異譚としては三次の『稲生物怪録』（江戸中期の妖怪物語）とも一部で一致する節があり、妖怪伝承の視点からも注目されてくる。

蔵地長足　八拾　Heritage of Setoda

19 浜ノ宮の厳島神社と大楠（おおくす）

【宮原】

宮原港の近くに鎮座する厳島神社、通称・浜ノ宮も厳島姫の島巡りの伝説を秘めるお宮になる。

宮島への道すがら、宮原の沖合の磯上に休息した後、大崎島へ移られ、次いで宮島に御鎮座と由緒（ゆいしょ）に記す。大崎島は大崎上島（かみじま）らしく、同島にも厳島姫の伝説と厳島神社を見る。

その由縁を偲んで祀られたものが浜ノ宮の厳島になるといい、氏神社（うじがみ）ではないがそれに同等の宮として、地域の尊崇を集めたという。

正面に海を望む配置と満潮時には海に没する鳥居と、宮島と同じような風景が描き出されている。

社殿の脇に神木（しんぼく）的に映える楠の巨木も目を惹（ひ）く。

宮島さんの祭礼である管絃祭では、宮原や御寺でもかつては互いに管絃船が巡幸し、御寺側では「どんどんちゃこ」（船上で奏でられる鳴り物に由来）の愛称で親しまれたという。

楠大ト社神島嚴ノ宮ノ濱　　九拾

Heritage of Setoda

20 とうびょうさんの杜（もり）（龍明神）

民俗 自然

【宮原】

浜ノ宮から東へ海沿いに進むと、こんもりとした小さな杜（森）があり、そこに小さな神が祀られる。

平成期に建立された鳥居に掛かる扁額には「龍明神」とあり、祭神は豊玉姫（とよたまひめ）という女神。

俗に「とうびょうさん」と呼ばれ、中四国地方に分布する蛇にまつわる憑（つ）き物信仰（俗信）になり、近隣では笠岡の道通（どうつう）さん（道通神社）が名高く、白蛇の像を祀る民間信仰が広く分布している。

『瀬戸田町史・民俗編』所収「小さなカミの分布」一覧を見ると、「七トウビョウ」と称して、瀬戸田全域で7つのトウビョウ神が祀られていた事が確認され、盛んだった事が分かる。

祭神の豊玉姫は、龍王綿津見神（わたつみのかみ）の娘で同じく龍蛇（りゅうだ）の姿とされる事から、蛇神信仰ともうまく合致・適合したのだろう。

当地はかつて小島であり、塩田開発（入り浜式塩田）で埋め立てられたという歴史も秘める。

杜ノンサウヨビウト　拾弐
Heritage of Setoda

21 空芋地蔵尊

【宮原】

宮原の柑橘畑の中に建つ粗削りな自然石の碑には、「空芋地蔵尊」と大きく彫り込まれている。

築造年月日や築造者の刻銘が無い為、いつ誰がどういう経緯でここに建てたかについては分からない。

サツマイモを唐芋とも呼ぶらしく、空芋は唐芋で、サツマイモの地蔵尊という事になるようだ。

からいも地蔵の呼称はここぐらいかもしれないが、他一般的には「芋地蔵」との呼称で広く知られる。

芋地蔵は、下見吉十郎という大三島出身の農民（後に六部僧となって諸国を巡歴）を讃え祀るもので、吉十郎は薩摩（鹿児島）からサツマイモの種を持ち帰り、それが周辺の島々へ広まって栽培された。飢饉の折にはこれに大いに救われたのだから、命の恩人としてその徳を偲び、信仰対象ともなるのも容易に頷けてくる。

芋代官こと井戸平左衛門は、吉十郎に続く今一人の恩人になる。

傍にあるお堂は女性が集うサロン的空間になっており、女性限定（女子会？）という話からこちらにも着目される。

民俗 石造

※…絵葉書帖・因島編では、東生口エリア（洲江町）、正善寺境内の芋代官をピックアップしている。

尊藏地半空　壹拾弐
Heritage of Setoda

22 神秘的なる荒木神社の杜と大楠群

【宮原】

宮原港近くの厳島神社で大楠を見たが、宮原には更に大楠の広がる神域がある。それが荒木神社境内の大楠群（椋の木も含む）で、社殿を覆い囲むその大楠の杜は神々しく、神秘的な心地にも至らせるものが多分にある。

『生口文化』第26号には、「生口島最大の楠」として紹介されており、陽光を遮る空間から古くは「暗宮」（クラミヤ）とも称されて、炎天下の折には避暑に最適な空間となり、また防風林の役目も担ったなど、恩恵の大きい鎮守の杜だったようである。

そこに鎮まる荒木神社は、古くは生口島全体の総氏神社で、島内最古のお宮というからこちらも着目すべきところになる。

神社の記録によると、江戸後期の文化5年（1808）春、宮島厳島神社の大鳥居建造用の材木として、神域の大楠3本を伐採したともいう。

群樹大ト柱ノ社神木荒　　弐拾弐　　Heritage of Setoda

23 瀬戸田の塩田を偲ぶ

【宮原】

とうびょうさんの杜の辺りから東へ海沿いに進むと、海岸端に写真のような半円形の石造物が点々と見える。それは塩田の遺構を護岸工事の際に再現したものになるという。

この石積みの構造物は塩田で出る余水を排出する為のもので、今治市には江戸時代の塩田遺構として登録有形文化財の「旧井口三番浜丸樋」があるが、それと同じものになる。

宮原に残るものは再現（復元）遺構ではあるが、瀬戸田の塩田・塩業史を有形のもので伝えてくれる、歴史的・民俗的遺構である事には違いない。

なお、北岸側の林地区にも同様に見られ、こちらはほぼ当時の状態が保たれているという（写真左下）。

ブ儘ヲ田盡ノ田戸瀬　　參拾弐

Heritage of Setoda

24 水中眼鏡をかけた石地蔵 ～海竜（かいりゅう）地蔵～

【御寺】

御寺地区の海際（かつては波止）に、大中小、三体のお地蔵さんが海を背にして祀られている。

こちらのお地蔵さんには、次のような悲話が伝わる。

この沖合では子どもの水難事故が度々あり、ある時は小学3年生の男の子が犠牲となった。

母親はおいおいと泣きながら、「欲しがっていた水中眼鏡を買ってきてやったのに、それを使う事もなく…さぞや残念だったろうに」と嘆き悲しんだ。

その後、子ども達が泳いでいると、浜には決まって亡くなった子の父親が現われ、犠牲が繰り返されないようにと見守っていた。

いつしか体調を崩した父親は、見守りに行けぬ代わりに石地蔵の安置を発起すると、自らの手で二体を造像した。以来水難事故も見られなくなったと…それが大中の二体とされ、大きい方には海竜地蔵と刻み、もう一つには水中眼鏡が掛けられていたというが、現在では海竜地蔵の刻銘も水中眼鏡も見えない。

※…海竜地蔵と刻んだ地蔵は、後に新造されたか、昔の写真のものとは違うようである。

藏地石タケカヲ鋭眼中水　四拾弐
Heritage of Setoda

25 いたずら好きな荒神（こうじん）さん

【御寺】

生口島で最古の寺院として、歴史深く格式高い御寺の光明坊の境内裏手には、いたずら好きな荒神さんという、ちょっと風変わりな神様が祀られている。

荒神という神様は西日本の特に農村部に多いようだが都市部にもあり、屋敷神・集落神・火の神（カマド神）…と神仏混合でやや複雑な神様であり信仰である。

こちらの荒神さんもその一例ながら、いたずら大好きで、御寺沖を通る船を止めては喜んでいた。困った里人は海が見えない位置に移動させるも、今度は山道を行く人を足止めするという始末。

そこでもう何も見えないようにと、祠（ほこら）を作って荒神さんを入れると、ピタリと扉も閉じてしまった。さすがの荒神さんもこれでは手も足も出なくなって、めでたしめでたしという結末。

荒神はその名称が示す通り、荒々しく怖い神、タタリ神という一面も持っており、いたずら好きとはそういう性格を伝える逸話になるのではないだろうか。

ンサ神荒ナキ好ラズタイ　伍拾弐
Heritage of Setoda

26 ねはんさん～光明坊の涅槃会～

【御寺】

春先の歳時記に、お釈迦様の亡くなった日を偲ぶ行事（仏寺の法会）として「涅槃会」がある。

光明坊の涅槃会は「ねはんさん」の名で親しまれ、旧暦2月14日から16日、現在は新暦3月最後の日曜日に営まれる。

愛らしい稚児行列も繰り出し、多くの参詣者で賑わう境内には露店（屋台）も多く並び立ち、終日賑わいを見る事で知られる。

『瀬戸田町史・民俗編』が採集する昭和初期のねはんさんの風景では、サーカスや見世物小屋も立ち、近隣の島々からも老若男女が訪れ、地元にあっては親類・知人を招いて接待する日でもあるなど、春の一大行事であった事が偲ばれる。

ンサンハネ　　六拾弐
Heritage of Setoda

27 虫送りと実盛さん

【御寺】

「虫送り」とは、初夏の頃に農村部において見られた（見られる）民俗行事で、農作物に害虫被害が無いように祈り、藁人形などを作ってこれを害虫や害を及ぼす悪霊などに見立て、集落の境で川や海へ流す風習・まじないになる。

御寺の一角に建つこちらの石塔（長方形の石碑）も、かつて虫送りが行われた場であった。

石塔は「実盛さん」と呼ばれ、実盛とは斎藤別当実盛という平家方の武将で、源氏との合戦の最中、田の稲株につまづき倒れた為、源氏に討ち取られた。その恨みが害虫となって稲につくとの伝承がいつしか出来上がり、虫送りは実盛送りとも呼ばれ、悲運の実盛を慰霊鎮魂する祭でもあった。

なお、御寺の実盛塔は土手の改修で元々の位置から少し移動しているようである。

ンサ盛実トリ逡虫　七拾弐
Heritage of Setoda

28

見返り峠
～御寺トンネル近くからの眺望～

【御寺】

県道372号線・林御寺線の御寺側、御寺トンネルを抜けた先の海側にある小スペースからは、すぐ眼下に瀬戸内しまなみ海道、その先には御寺の町並みと海が望めるビューポイントで、南面にほぼ真正面の先に石鎚山と、日常的な風景として四国を感じることができる。

御寺に限らず生口島の南側からは、四国山地が屏風のように連なり立ち上がって見える。

この峠は「見返り峠」と呼ばれたそうで、この辺りで海側をふり返り、しばしの休息を取った事に因むのだという。

御寺沖は穏やかな湾のような海域が広がる。遠浅で棚まで遠く沖合いに船を泊めたそうだ。

また、同様に南面やや東側に海島を望む遠く直線状の先には、愛媛県新居浜市の沖合にある四阪島が位置し、その昔には四阪島製錬所の灯りや煙が遠望されたとも聞く。

※…小スペースには一時的な駐停車も可能だが、道路のすぐ横であり見学には注意が必要。

現地へのルートとしては、御寺側からがオススメ（御寺側から入ると進行方向沿いになる）。

峠ヲ返見　八拾弐

Heritage of Setoda

29 四辻堂の「つめり地蔵」

【名荷】

名荷公民館の前は十字路をなす四つ辻になっている。四つ辻は時に異界との境目とも見なされ、辻神なる妖怪も出没するとも言われた。その為に九州・沖縄では辻神を防ぐ石を配置するらしいが、その民俗で見た時、この四つ辻の辻堂もそういう意図かと思ってしまう。

が、ここでは辻という場よりも「つめり地蔵」という異名を持つお地蔵さんの方が主題となる。

その昔の昔、名荷の磯辺に大きな蟹が棲み、大きな爪で海辺を通る人をつめったり引き込んだりして、里人を困らせていた。

ある時、旅の僧が当地にやって来てこの話を聞き、法力で蟹の爪を封じた。しかしそれもかわいそうと思った僧は、年に一度だけつめる事を許す日を与えた。そこからこのお地蔵さんの祭日には、互いにつめり合っても良いという奇習が生まれ、とりわけ若い男女の内に盛り上がったとか。

縁結びの地蔵という御利益は、男女交際の機会でもあった事を偲ばせている。

藏地リメツノ堂辻四　　九拾弐

Heritage of Setoda

30 名荷のてんびん祭り

【名荷】

名荷地区のお盆の風物詩・歳時記に、「てんびん祭り」が見られる。てんびんは「天秤」と書くが、計りのそれとは違うもの。

祭礼に見る「てんびん」は、神前に捧げる灯明、即ち献灯的な意味を持つようで、尾道・向島でも形の違いはあれど、てんびん飾りが登場しており、その昔の祭礼ではなじみの風景だったようだ。

名荷のてんびん祭りは、8月13日・14日の両日、触れ太鼓を先頭に、無数の紅提灯を吊るした孟宗竹を掲げた行列が子ども達と共に町内を練る。そして陽が落ちると提灯が灯り、暗闇にほのかに紅さすような幻想的な光景が演出される。

元は秋祭りにおいて見るものだったらしいが、いつの頃からか盆行事にも登場するようになったという。

てんびん太鼓のリズムにのって、「チョンヤレ」、「チョンヤーレ」の掛け声を発する事も含め、民俗芸能としても注目したい祭礼遺産・芸能遺産といえる。

リ祭ンビンテノ荷名　　拾參

Heritage of Setoda

31 オコゼを供える延命地蔵

【林】

海沿いの道から尾道市瀬戸田福祉保健センターの角を曲がり、山側の道へ入ると、辻堂に祠に石仏と、神仏混合の祈りの並びと出会う。

延命地蔵を祀る辻堂の他、石仏はそれぞれ島四国の札所で第80番～82番、総じてお大師さん。石祠は境界を守るサイノカミ（道祖神）。

時計を設置した辻堂に祀られた延命地蔵は、延命の冠通り、病気平癒（へいゆ）の御利益が語り伝わる。

江戸時代後期・宝暦（ほうれき）8年（1758）、林村の庄屋・竹内完治の息子が病に伏し、光明を見出す思いで完治は延命地蔵を建立して祈願をしたところ、平癒叶った。以来、病気平癒の霊験で知られるようになったとの来歴が台座に刻まれる。

地元から採集した話では、延命地蔵にはイボ取りの御利益もあるようで、祈願成就後のお返しには、魚のオコゼを供える慣わしがあったとの事。

藏地命延ルエ供ヲゼコオ　壱拾参
Heritage of Setoda

32 島々に文化を届けた文化船ひまわり号

【林】

尾道市瀬戸田B＆G海洋センターの敷地内に保存・展示される木造船は、瀬戸内の島々に本を届けた、まさしく文化を運んだ文化船だった。

文化船ひまわり号は広島県立図書館が運航した移動図書館船で、車での移動図書館は一般的にある中で、船舶でのそれは全国的にも唯一となるものだった。

昭和36年（1961）12月に江田島造船所で進水。運航期間は昭和37年（1962）4月1日～56年（1981）7月31日までの約20年間（以後は移動図書館車みのり号と交替）。

本だけでなく映画のフィルムも積まれ、年8回のサイクルで県内19の島々を巡った。

役目を終えた後、瀬戸田町が県から寄贈を受けて文化教育資料として保存。尾道市と合併以後の平成29年（2017）からは地元有志の手で保存プロジェクトが立ち上がり、補修やイベント開催など地道な活動が展開され、令和3年（2021）には日本船舶海洋工学会による「ふね遺産」の認定を受けた。

號リワマヒ船化文　　弐拾參

Heritage of Setoda

33 生口氏の城跡～茶臼山城址～

【中野】

小早川隆景の名でよく知られた小早川氏の一族一派が生口島へ進出し、島に拠っていた南朝方勢力を一掃。新たな島の支配者となったのが生口氏であった。

その拠点となったのが中野地区にある茶臼山（188・2m）の山上に構えられた茶臼山城で、生口氏（生口氏を名乗るのは島に拠点を置いて以降）進出以前は南朝方が立て籠った城だった。

茶臼山城を本拠に、鹿田原には俵崎城、宮原には宮崎城、高根島には滝山へ、それぞれ支城（砦や見張り所としての機能）が構えられ、交通上・経済上においては瀬戸田浦も押さえ、小早川氏グループの更なる発展と、村上氏と並んで水軍勢力の増強・整備にも一役買う事になった。

※…生口氏の城で茶臼山城と並ぶ俵崎城址は日本遺産（村上海賊）の構成文化財としてピックアップされている為、ここでは構成外の茶臼山城址のみを取り上げています。

址城山白茶　参拾参
Heritage of Setoda

34 中野集落の旧家群

【中野】

中野集会所のある周辺集落には、歴史を帯びた長屋門を構える屋敷や土蔵が建ち並び、映画のワンシーンになりそうな趣のある風景が広がる。

『瀬戸田町史・民俗編』での民家調査によると、棟札から建築年代が特定されたものには、江戸時代後期の弘化5年（1848）の棟札を最古に、江戸後期の建物が2軒、明治期のものが2軒確認されている（その他の建物の建築年代は特定されていない）。

中野集落は果樹・柑橘はもとより除虫菊栽培、更には海運業も活発で船持ちの家も十数軒あったという。

そんな往時の繁栄ぶりを今に偲ばせるのが、この旧家群の風景である。

群家薈ノ野中　　四拾參
Heritage of Setoda

35 地蔵院の灯籠流し

【沢】

その昔の尾道水道では、夏の風物詩として灯籠流しが見られた（妙宣寺の浜施餓鬼）。しかし、時代の移り変わりの中でその風景もいつしか消えて行ったが、瀬戸田では今もその風景が残る。

瀬戸田の灯籠流しは沢地区にある地蔵院（真言宗）で行われる伝統行事で、旧暦7月23日、新暦では8月中～下旬の頃になる。

引き潮に乗せて瀬戸田水道へ流された約千基の灯籠が、夜の海に光の筋を描く様は幽玄の世界そのもの。

地蔵院には又、「口紅地蔵」と呼ばれる秘仏の延命地蔵菩薩像が安置される。

その名の通り口紅をさす極めて珍しいお地蔵さんで、口紅をさす以前は女性の願いなら何でも叶える霊験で知られ、門前市が立つ程の参詣で賑わったという。

口紅をさされて以降は男女を問わず願いを聞き入れるお地蔵さんとして信仰されている。

シ流籠灯ノ院藏地　伍拾參　Heritage of Setoda

36 腰無地蔵（こしなし）～腰痛に御利益アリ～

【沢】

沢港傍、内海（ないかい）造船本社工場の正門前にあるお堂は、生口の島四国第66・67番札所になり、加えて番外札所として腰無地蔵尊が祀られている。

腰無地蔵は腰痛に御利益ありとして信仰され、旧暦6月23日、新暦では7月23日の地蔵祭で賑わう。

『瀬戸田町史・民俗編』に記録されるところでは、祭日の前日にはお世話をする当番によって、祀られたお地蔵さんが全て洗われ、次いで2本の笹竹が立てられて願い事を書いた短冊（たんざく）を吊るすとある。

因みに現在の腰無地蔵は2代目になるという。

案内石柱に建つお地蔵さんの、キノコかイチゴのようにも見える帽子も微笑ましい。

藏地無腰　六拾參
Heritage of Setoda

37 子を想い、母を想い…身代わり地蔵（見返り地蔵とも）

【沢】

沢港フェリー乗り場の東に、海を見つめるお地蔵さんがポツンと建っている。

身代わり地蔵、或いは見返り地蔵と呼ばれるこのお地蔵さんには、母子の情愛を語り継ぐ、次のような民話が聞かれる。

病の母を助けようと、薬草を求めて旅に出た子は生口島の辺りで行方知らずとなった。

心配した母親は島へ辿り着き、島の巫女（或いは祈祷師か？）から息子の居る場所を教えられる。その場所で一心不乱に祈ると息子の姿が浮かび上がった。

波の音と共に、息子は我に返ったようにその姿をはっきりさせたが、反対に母親の姿はどこにも無かった。

呆然とする息子は、母親が自分の身代わりになった事を旅の僧から聞かされる。そして息子は母親を弔う地蔵を建立した。

身代わり地蔵は元々、この辺りに在った小島「木の子島」に在ったともいわれる。

藏地リワ代身　七拾參

Heritage of Setoda

38 木の子（きのこ）島の記憶

【沢】

身代わり地蔵の元々の建立地と一説に言う木の子島は、内海造船本社工場の1号船台辺りにあった小島で、干潮時には陸続きにもなった島だったようだ。

現在は完全に埋め立てられており、島の痕跡（こんせき）を見出す事は出来ないが、わずかに内海造船社員寮の名「木之子寮」にその名残が見出される。

また、かつては木の子島に祀られていたという白蛇神社（とうびょうさん）は、沢港近くに鎮座する沢八幡神社の内に合祀されているという（境内社の内にトウビョウと読める「遠廟社」があり）。

なお、木の子島と同じような例に、向島町の小歌島（おかじま）がある。

※…写真は潮音山公園より木の子島のあった辺りを遠望。
古地図は江戸時代の地誌『芸藩通志』より生口島澤（沢）村の図で、塩浜と並んで木野子島が確認できる。

憶記ノ島子ノ木　　八拾参

Heritage of Setoda

39 亀の首地蔵

【沢】

沢漁港の近くの岩礁上に建つお地蔵さんは、亀の首地蔵と呼ばれ、亀主という亀の化け物を退治した民話を秘める。

亀主は生口島周辺の亀の総大将で、配下の亀らと共に近海を往来する船の底に穴を空け、浸水させると船の積み荷を略奪、乗っている人も食べるという悪事の限りを尽くしていた。

襲う船が居なくなると、今度は人身御供を求める亀主に対して、向上寺の若き修行僧の調明が、この機会に退治しようと発起する。

一計を案じた調明は、亀主にその身を捧げる場所として向上寺を指定。陸へ上がり、山上への道のりに疲れ果ててきた亀主。それを好機と見て、調明は懐に忍ばせていた小刀で亀主の首を刎ねた。

その首が落ちた所が亀の首地蔵が建つ岩礁（亀の首岩）になり、亀主の鎮魂と海難事故の防止を願って後に地蔵が建立されたという来歴。

干潮時に現れるその岩礁は亀の形をしているといわれる。

藏地首ノ亀　九拾參

Heritage of Setoda

40 高根の片富士（かたふじ）

【高根島】

富士山の山容に似た山を「○○富士」、そしてその片側を欠いた形で似ている山を「片富士」と呼ぶ例は各地にあるが、高根島の南にそびえる高根山（３１０・２ｍ）は高根の片富士と称されてその一例にある。

昔の写真絵葉書にもその風景が切り取られており（写真）、瀬戸田名所の一つとして古くからなじみ親しまれてきた事が分かる。

高根山は船乗りにとっては位置関係を確認する為の目印（「山当て」という）ともなった山でもあった。

左頁写真は潮音山公園から望む高根片富士の景になる。

士富片ノ根高　拾四
Heritage of Setoda

41 高根島灯台

【高根島】

建築 歴史

高根島の北端、対岸には三原市の幸崎（さいざき）を望む位置に高根島灯台が建つ。

初点灯は明治27年（１８９４）５月15日で、明治期建造の灯台の多くが戦災等により後に建て替えられている中にあって、当時の姿を良好に保つ歴史的価値の高い灯台である。

明治43年（１９１０）４月には灯台から潮流（ちょうりゅう）信号塔へ転換して、船舶通航信号（せんぱくつうこう）と潮流信号を担ったが、時を経て昭和28年（１９５３）９月から、再び灯台としての役割に戻って今に至る。

灯台手前の石段を備えた高台は信号塔の跡になり、敷地内には信号舎などの建物もあった。

春になると桜が咲き誇り、隠れた花見スポットでもある。

台灯島根高　壱拾四
Heritage of Setoda

42 鶴の飾りのある家

【高根島】

高根島東沿岸にある民家の内に、母屋（おもや）の破風（はふ）部分に見事な鶴の飾りが施されているのが目に留まる。

最初は漆喰細工による鏝（こて）絵かと思ったが、家主の大本さんにお伺いすると木彫りであった。

建物は2代前の当主が建てたもので、建築を担った大工棟梁（高根島に居た地元大工）の父親がそういう細工に長けた人だったらしく、家の内の欄間（らんま）と共に製作したものになるのだという。

築百年は越えている建物自体にも風格があり、門口両脇には石柱が配され、庭石も小豆島から運んで来たものを配するなど、建築視点からも着目されるところが多い。

家ルアノリ飾ノ鶴　弐拾四
Heritage of Setoda

43 お祝い事には出席します ～虫封じと縁結びのお地蔵さん～

【高根島】

高根島南岸、グランピング施設の裏手の小道に建つお地蔵さんは、虫封じ、加えて縁結びの地蔵として島の人々の信仰を集めたもの。

来歴を辿ると江戸時代、耕作地を確保する為にこの浦を埋立てた際、同工事の犠牲になった海の生き物達を供養する目的で建立されたものだった。

虫封じは害虫が湧かないようにとの祈願からだが、縁結びに当るらしい部分には愉快な来歴がある。

結婚式など島での祝いの席には決まってこのお地蔵さんが出席？し、とりわけ披露宴（ひろうえん）がお好みで、振舞酒（ふるまいざけ）もちゃっかりおよばれした。

結婚式や新婚の家にお地蔵さんを担ぎ込んで祝う（担ぎ込まれる側としては嫌がらせに映るやも）風習があるのと通じる昔話なのかもしれない。

並びに見られる石積みの囲いを持つ水溜は農業用らしいが、その内の一つを覗くと「龍王橋」という刻銘が見える。

藏地ナキ好ガ事ィ祝オ　　參拾四

Heritage of Setoda

44 神仏混合の神秘なる岩場
～滝山観音と巨岩、石仏群～

【高根島】

高根山の南中腹には、観音さまを祀った滝山観音堂がある。

堂内の壁に掛かる古びた額は、俳諧発句を奉納したもので、瀬戸田風景を題材として春夏秋冬毎に計31句が詠まれる。

時代は江戸時代の寛延2年（1749）の3月、寄進者は生口連中とある。

お堂の後背には巨岩が鎮まり、薬師三尊（薬師如来と両脇侍）に三十三観音、弘法大師の石仏群が張り付くように配される。

諸仏が配される以前にあっては神宿る磐座（神宿る神聖なる岩石）のような存在にも映り、神仏混合世界の神秘的な雰囲気を漂わせる。

また、観音堂周辺に見られる石積み（石垣）群にも圧倒されるものがある。

お堂から更に登った地点には、石鎚山・大峯山（奈良県にある修験の霊場）の分霊を祀る石祠もあるが（麓の鳥居の扁額に石鎚・大峯の名を刻む）、そこへ至る足場は危険である為に注意が必要である。

群佛石、岩巨ト音觀山瀧　　四拾四
Heritage of Setoda

45 高根のホーランエンヤ

【高根島】

旧暦の6月17日、宮島の厳島神社では船祭りとして知られる管絃祭が行われ、厳島神社の分社でも船で海上を巡幸する祭礼（管絃祭）が島嶼部を中心に多い。

高根島の厳島神社でも、管絃船の転訛と思われる「おかげん船」が曳き船と共に海へ繰り出し、太鼓と鉦のお囃子の音にのって瀬戸田水道を往来する。

瀬戸田の管絃祭は「ホーランエンヤ」（ホーランエーとも）と呼ばれるが、これは「ホーエンヤ」というおかげん船からの掛け声と、「ホーランエー、ヨイヤサノサッサ」という曳き船からの掛け声に因んだもの。

松江市にも「ホーランエンヤ」の名で同様な船祭りが知られる（城山稲荷神社の祭礼）。

ヤンエンラーホ ノ根高　　伍拾四

Heritage of Setoda

46 島四国～生口島の八十八ヶ所～

民俗

【全域】

因島、向島、岩子島にも見た「島四国」と呼ばれる四国霊場八十八ヶ所のローカルなるご当地版は生口島にもある。

名荷の1番札所から始まり、因島洲江（すのえ）町、因島原町、御寺、宮原、荻、泊、田高根、殿山、槇ヶ原、垂水、福田、瀬戸田、沢、鹿田原、中野、林の順路で88ヶ寺の寺堂が設けられている。

立地場所としては、山麓寄りの旧道沿いで、辻に面する地点や寺院の境内が多いと『瀬戸田町史・民俗編』が紹介している。

お堂では宗教的行事のみならず、場所によっては集会所的な場としても利用されており、地域内のちょっとした寄り合い場所としても親しまれる。

旧暦3月21日（新暦では4月後半～5月）のお大師さんの縁日には、お接待（せったい）を受けに巡る子ども達・老若男女の姿で賑わうのは、どこも共通した風景。

※現在はコロナ禍の影響で休止とする所が多い。

※写真は林地区の 80~82 番。

所箇八拾八ノ島口生　国四島　　六拾四
Heritage of Setoda

参考文献

※刊行順

『復刻芸藩通志・第二巻』同刊行会、１９６３
『豊田郡誌』（復刻版）豊田郡教育会編（原本）、名著出版（復刻）、１９７２（原本１９３５）
『霊場と村　生口島における八十八ヶ所の存在形態』広島工業大学工学部建築学科地井研究室、１９７７
『広島県神社誌』　同編纂委員会編、広島県神社庁、１９９４
『瀬戸田散策』　宮本厚志編著、びんご出版、１９９８
『瀬戸田町史・民俗編』瀬戸田町教育委員会、１９９８
『瀬戸内海の十字路せとだ　観光ガイドブック瀬戸田町』　瀬戸田町商工会、１９９８
『わたしたちの町　瀬戸田』（改訂版）同編集委員会編、瀬戸田町教育委員会、２００２
『瀬戸田町史・地理編』瀬戸田町教育委員会、２００３
『瀬戸田町史・通史編』瀬戸田町教育委員会、２００４
『合併五十周年記念誌　瀬戸田を歩く』瀬戸田町、２００５
『シマボン　いくちじま編』中野佐和子編著・刊、２０１１
『生口文化』…第２号（発行年未記載）
第４号（発行年未記載）
第５号（発行年未記載）
第６号（発行年未記載）
第11号（発行年未記載）
第18号（１９９８）
第26号（２００６）瀬戸田町郷土文化研究会

尾道文化遺産マップ4
絵葉書帖「芸州瀬戸田」編

表紙写真
写真絵葉書「安藝國瀬戸田全景（其二）」大正～昭和初期、尾道学研究会蔵。

写真・編集・デザイン
西川　真理子（尾道チャノマ図案室）

写真提供
公益財団法人平山郁夫美術館　（No.08作品写真）
耕三寺博物館（No.11）
尾道市史編さん委員会事務局（No.26・30・35）
西井　亨　（No.45）

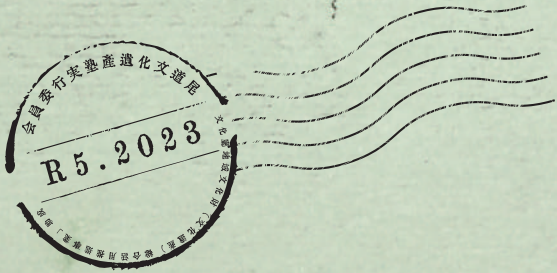
制作協力
瀬戸田町郷土文化研究会
萬所　和幸（瀬戸田町郷土文化研究会）
橋本　達也（同）
藤田　玲生（同）
西河　哲也（同）
根葉　正文（平山郁夫美術館）

企画・制作・発行
尾道文化遺産塾実行委員会
事務局　尾道市企画財政部文化振興課

発行年月日　令和五（二〇二三）年　三月

文化庁「地域文化財総合活用推進事業」助成

Post Card



郵便はがき